
福島第一原子力発電所事故における医療活動、ほか

(谷川攻一ほか、広島大学 東日本大震災・福島原発災害と広島大学、2013、p.14-18)

2013年7月19日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

【概要】

この論文は平成23年3月11日に発生した東日本大震災に対して、広島大学から派遣された四名の方の活動報告である。

【緊急被ばく医療推進センター 副センター長 谷川攻一さん】

谷川さんは広島大学被ばく医療チームの一員として震災発生直後から活動を開始された。活動内容は①震災直後の急性期活動、②J ヴィレッジ診療体制整備、③避難住民の一時立ち入り、④福島第一原子力発電所内の救急診療所活動に分けられる。

①震災直後の急性期活動

3月12日に千葉市の放射線医学総合研究所へ向かい、翌13日には福島県対策本部にて現地での活動計画立案に参加された。翌日14日には20km圏内に残された患者・介護施設入所者の避難に伴う放射線サーベイを行われた。また、福島県立医大での被ばく患者の受け入れ体制整備の支援、16日に原発内で発生した胸部外傷患者救急搬送のため原発サイト内へ出動・福島県立医大の除染活動にも従事された。その後、福島県庁内のオフサイトセンター医療班として、被ばく患者の受け入れ機関調整・搬送フローあんの作成・一時立ち入りへの準備活動に従事された。

②J ヴィレッジ診療体制整備

復旧作業に従事する作業員の事故に対する医療対応のため、3月末に発電所の南20kmに位置するJ ヴィレッジをトリアージサイトとして整備された。

③避難住民の一時立ち入り

5月からの避難住民の20km圏内への一時立ち入りのため、緊急医療・放射線サーベイにおける支援活動を行われた。

④福島第一原子力発電所内の救急診療所活動

原子力発電所内で作業する数千人の作業員の緊急疾患や被ばくに迅速に対応できるよう、7月に5/6号機サービス建屋内に救急診療室が開設された。その運営のために設置された「福島第一原子力発電所救急医療ネットワーク」の代表として、スタッフの派遣調整・施設整備・救急医療体制の整備に従事された。

【大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門救急医学 准教授 廣橋伸之さん】

震災発生同日の午後よりDMAT（災害派遣医療チーム）出動で海上自衛隊輸送管「くにさき」に乗り、13日早朝に横須賀港に到着されEMIS（広域災害救急医療情報システム）によるDMAT本部からの指示で福島県立医大へ向かわれ、13日午後に福島県立医大に到着し男女共生センター

へ向かうよう指示を受けられた。

男女共生センターでは本来の DMAT 医療ではなく、緊急被ばく医療への転換を余儀なくされ、爆発事故以降避難してきた消防・救急隊・警察・救護班・共生センター関係者等の放射線サーベイに従事された。センター内には 10km 圏内の病院から避難してきた患者 120 人と医師・看護師・関係者も収容されていた。サーベイにより収容患者中に 8 人の重症者が判明し、救急救命師から知りえた周辺病院に連絡を取り続け、深夜 0 時過ぎに搬送を無事終えられた。

午後は福島県立医大でドクターヘリ運航調整補助を行われ DMAT としての任務を終了され、15 日に広島へ帰還された。

その後も緊急被ばく医療チームの一員として福島医大・オフサイトセンター・J ヴィレッジで活動され、現在第一原発救急医療質において活動を継続されている。

活動の感想として、殆ど情報の入らない中で DMAT から緊急被ばく医療への転換に戸惑いは否めなかったが、現地で共に活動されたスタッフの方々との臨機応変な行動は貴重な経験となったとのことである。

【病院看護部 高度救命救急センター 看護師 原菜依子さん】

先述の廣橋さんと同じ DMAT チームとして福島に出動されました。活動時間・場所は重複するため省略します。

この活動を通して原さんの着目された問題点として、まず圧倒的な情報不足と情報経路の遮断があった。遠方に加えて大規模災害であったため、不確実な情報に惑わされることによる活動の停滞や移動手段の確保が問題であったとの事である。

また、これまでの DMAT での訓練の成果が十分に発揮できない悔しさを感じたとのことであった。被災者は大災害に対する恐怖・被ばくへの不安・情報不足による孤独感・今後の生活に対する絶望感にさいなまれており、正確な情報で過度な苦悩を軽減できるよう早期からの心のケアの重要性を痛感したとのことであった。

【病院薬剤部 副薬剤部長 畝井浩子さん】

先述の廣橋さんと同じ DMAT チームとして福島に出動され、調整員として出動された。活動時間・場所は重複するため省略します。

この活動を通して原さんの着目された問題点として、宿泊場所の確保が困難を極めたという点であった。隊員たちが寒さと初めての活動に疲弊しているにもかかわらず、広島の薬剤部職員に連絡し広島から手配してもらうことでようやく確保できた。

食糧調達にも課題があった。自衛隊よりコンビニ・サービスエリアの情報を得て、調達を行っていたが、14 日にはサービスエリアに殆ど物資が無く、できる限りのパンなどをなんとか入手したとのことであった。

平時よりの訓練の大切さを実感し、改善点として出発前の物資・活動費のより確実な準備、調整員を 1 チーム 2 人に増員することなどを挙げられていた。